

第2回（仮称）新三宮図書館整備検討会 議事録

日 時：平成30年8月30日（木） 12時30分～14時30分

場 所：神戸市立中央図書館2号館4階 研究室(1)(2)

出席者：（委員）中井会長、小林委員、佐藤委員、吉富委員

（事務局）中央図書館長、総務課長、総務課担当課長、総務課担当係長3名
都心三宮再整備課担当課長、担当係長

傍聴者：2名

- 1 開会、挨拶
- 2 委員紹介
- 3 協議

（1）第1回検討会の振り返り

事務局より配付資料3に基づく説明

（2）他自治体図書館の事例

事務局より配付資料4に基づく説明

（3）コンセプトや基本方針等について

会長：資料3（第1回検討会の振り返り）と資料4（他自治体図書館の事例）も踏まえ、コンセプトや基本方針について考えるべきことを時間の許す限り議論したい。

キーワードを整理していただいているので、資料3の「利用者層と立地環境特性」の辺りで何かお気づきのことがあれば。吉富委員は、立地環境、場所性という面からどうか？

委員：神戸市は開港150年でもあり、多文化や国際という言葉とは切り離せない場所柄だ。図書館にはなかなか取り入れ難かったように思うが、今後を考えると多様な人たちにどんなサービスをするかという話とは別に、いろんな人が利用できる機会を作るということがあるだろう。カナダやアメリカでは町の図書館にも言語別に図書が置いてあり、中国語やスペイン語、韓国語、ベトナム語などの本がある。それらの言語の本のあるコーナーというのが必ずある。そういうものがあると、例えば今神戸で定住者が増えているのはベトナムの人だが、その人たちも利用するわけだ。あそこに行けばどれくらいの本がある、自分の子供たちを育てるときにも例えばベトナムの絵本があるなど、スペイン語やベトナム語の本が図書館にあるということ、そういう意味の多言語。私もカナダのトロントで日本語のコーナーがあることに驚いたように、観光で一時的に来られた外国人も喜ぶかもしれない。また観光で来た人にはパンフレットが置いてあって、様々な言語での観光案内があっても良い。それとは別に、住んでいる人たちの多言語や多文化を尊重するような視点があると、そこにその人たちも来る。住んでいる人は、今は図書館にあまり来ない。中央区には世界の宗教の施設、寺院が14もある。そこにも外国人の方がいるが、その人たちも

図書館に来られるようになったらとてもいいと思う。世界の宗教を見なければ神戸に来たら良いと言われるくらいなのだから。そういう住んでいる人のことを考えた図書館が今神戸にないと思う。(そういうものがあれば) 例えばその文化を知りたい、そういう言語を学びたいという神戸の人たちも視野が広がる。そこで例えばベトナム語で絵本の読み聞かせのイベントがあれば、日本の子たちも外国語の絵本に触れる機会にもなる。交流という意味でも、その言語の国別の人のためのコーナーというだけでなく、図書館全体の多様性、多様な環境を作るには多言語や多文化の視点というのがこれからは絶対に要るのではないかと思う。

9月にも長田で多言語のガイドブックを作るのだが、今はインターネットで簡単に誰でも発信できるのでお金をかける必要はなく、ちょっとした放送ブース、よくあるサテライトスタジオのような、ガラス張りのマイクを置いてあるぐらいのそういうコーナーがあるだけで、時々イベントでそこで何かおしゃべりをしている。図書館に関わることでいいし、時間帯を決めてライブ的要素があったり ところで例えばちょっとした 発信できるような ツールやスペースがあることで多様性をどう見せるかということも必要と思う。カナダなどでは図書館ラジオがあり、災害時に情報発信をしている。私たちも神戸市と災害時に災害ラジオを立ち上げる協定を結んでいるが、そういう発信の場が必要であると思う。そのような使い方もでき、図書館には情報があるのでコンテンツをうまく発信するツールとしても使える。

会長：多言語に関して資料的なサポートは、今神戸市の中ではどこが行っているのか。やはり中央館か。

事務局：中央図書館には昔から外国語の本があり、冊数としては2万点くらいである。やはり英語が主であるが、(地域的な) 特徴として新長田図書館がある程度所蔵している。地域的に在日韓国人の方が多く、(外国語図書が) 2,500冊くらいあるが、その中で一番多いのがハングル、アジア言語のものも多少持っている。ただし目録データがうまく採れていないため検索がし難い。職員に尋ねてもらえればカード目録があるのだが、検索端末での検索が難しいという状況である。新長田では本だけではなく在日外国人児童読書の会を定住外国人支援センターと連携して行うなど、日本文化のことを知る子供向けの講座や、子供たちの母語での読み聞かせといった活動は行っている。

委員：新長田図書館に絵本を持って行ったことがある。そういった活動は今後必ず増えるだろう。必要とされると思う。

委員：そういう多言語の情報を三宮図書館で得やすい方が良いのかどうかという問題だろう。新長田や中央ではすでに始められていると思うので、三宮図書館でそれが必要とされるのであれば、そういう情報提供できるような機能は必要だと思うが…。

委員：中央区などのローカルなところでやるのがいいのかということは分からないが、神戸市全体では(外国人の方の) 数が多いので絶対に足りていない。

委員：全体にいらっしゃるのならば、人が集まりやすい三宮で情報が得られることは市全体として有効な話だろう。

委員：市全体に外国人の方は多く、長田区では在日コリアンやベトナム、スパニッシュ系、中央区では英語圏の人やインドの人などがおられる。神戸市全体でも割合として増えているので、今後益々そういう需要は増えると思う。区と市の棲み分けをどのよ

うにするのかは…。

事務局：効率を考えれば住んでいらっしゃる方が多いところを重点にやっていくことになるが、やはりなかなか難しいだろうか。

会長：前回の議論でもあったように三宮というのは入口としてたいへん行きやすく、他の区からでも買い物に来たときに寄ろうということがあるのであれば、きっかけではあるのでいろんな方々が来られた時に少し（ずつ得られるものがあると思う）。しかし面積が 1,500 m²しかないので、全部やることには無理があり、何か特徴を出しても良いのではないか。今回、文化ホールとの連携という話が出ているが、実は図書館間の連携もちゃんと取った方が良いように思う。もっと蔵書の共有、「その資料だったらあそこの何々図書館に行かれた方が、資料が充実していますよ。」というようなことを三宮でレファレンスできれば良いのではと思う。そういう窓口とともに少しは（多言語の本を）置いたらどうか。たくさんが大変なら少なくともよい。入口ということなら多くの種類を少しずつでも置いておくというのもひとつの手だろう。例えばベトナム語を重点的に置くということもあるかもしれないが。“さわり”でよければ三宮では少しずつ置き、深くはもっといろんなところを紹介するというのが良いのではと感じた。

委員：変化することなので、この言語と決めない方が良くもしい。

委員：アクセスが良いからこそ、入口になるのが重要ということがひとつある。日本の図書館界全体として多文化サービスは伸び悩んでいる。いろんな言語の資料を置くところ自体は増えてきているが、置いてみたはいいが実際の言語に対してニーズを持っている人たちのことを図書館側がよく分かっておらず、置いても実際に来てくれているのかよく分からない。お互いに届いていない状態である。日本に限らず、世界中どこでも、置いてはみたもののあまり来てくれていないということが発生しているらしいが、とりわけ日本はその傾向が顕著であるようだ。三宮に一旦立ち寄ってもらった人たちには各図書館でもやっているのだということが伝わって、あるいはその人たちのニーズが図書館の方にも伝わってという入口になってくれれば良いと思うが、どうすればそうなるだろうか。

委員：まず図書館の入口で、こういうものがあると見えなければ分からない。

委員：確実にサインは必要だ。多言語の資料があっても、そもそも検索画面が日本語しかないのなら意味がない。全言語は無理としても、主要な言語は切り替えられないとまずいだろう。

委員：私たちは医療ケアもしているが、病院に行ったら来ませんよと言われる。そこに行けばベトナム語でも治療が受けられるということが分かれば、現在年間 1,000 件（もの受付件数が）ある。そういう情報が伝わっていないのが問題。住んでいる人たちが得たい情報を得られないという格差がある。本を読みたくても読めないという差を埋める視点、全部は絶対無理だがそういう入口になれば良いと思う。

委員：当然、図書館でそのすべてを完結させるのは不可能なので、そういう団体の方と協力してという意味での、そこにつながるハブとしても使えるものであってほしい。

委員：新長田の定住支援センターとの連携のように、生きた動いたものにつながるものであったら良い。

委員：結局、人と人がつながっていないと情報が流れない。展示や掲示だけでは…。

委員：人が誘導してつなぐということ。

委員：観光にも関わるが、神戸は海外から観光に来た人からすると日本らしくない。京都や奈良と比べて観光の第一候補から外れるが、観光客ではなくて住んでいる人、神戸に来て事業を起こして神戸の街に住んで仕事もして、例えばパン屋さんでもケーキ屋さんでも全国的に有名な名前の方は昔からたくさんいる。住んでいる海外の人が多から日本的ではないわけで、そういう風に住んでいる人たちを大事にするのが神戸である。

委員：それは正しい。キーワードはつながりだと思う。

会長：これは神戸だけではなく、おそらく日本全体の話だと思うが、人口が減ってきて労働力などで外国の方に入ってもらえないと日本という国が成り立たない。そう考えると、神戸だけでなくもっと入っていただくことになる。労働力として入っていただいた人たちは、そこで子供を育てることになる。子供は学校等に行って日本語を学ぶ機会があるが、お父さんお母さんはなかなか日本語を学ぶ機会がない。図書館は社会教育施設として、もう少しそういった役割も担えるのではないかと思っている。図書館に行けば多文化や多言語との出会いがある。金沢市に子供だけの図書館ができたが、あらゆる言語の『はらぺこあおむし』が集められていて、同じ本を多言語で集めてあるとなかなか面白いと思った。そういう入口でもいいのではないか？思い付きだが…。

委員：そういう中で交流が生まれるのではないか。

会長：これから少しずつ、外国の方と我々との関わりは変わらなければならないのだろう。

委員：労働力を海外に頼るなどの穴埋め政策がいいか悪いかは別として、実際に住んでいる人たちは日本社会の何かを担っている。その人たちの居場所、その人たちのことを考えないと、もう来てくれなくなるかもしれない。

会長：そういった受け皿という意味でも図書館の役割がある。特に三宮は、観光地かどうかは別としても、市内にお住まいの方々も買い物で来られるのであれば、そういったものに接するチャンスはあっても良い。

委員：最低限は分からないが、小規模でもいいのでそのようなスペースは確実に用意する。

委員：そのための見せ方として、先ほど話したようなラジオブース、そしてマイクがあればしゃべりたくなる。あまりしゃべれない人がマイクを置くだけでおしゃべりになる。そういう意味で多様性というのは外国の方だけのことか、どこまでするかは別にして、展示や音声といったいろいろな多様性に備えるということ、これからの時代は考えなければならない。

会長：その他はどうだろうか。

委員：図書館ボランティアの人たちの活動とは、どのように図書館を活用したいのだろうか？

委員：ひと口に図書館ボランティアと言ってもやっていることは様々で、例えば配架のボランティアや本の修理をされている方、私たちのようにおはなし会をしている人などいろいろだが、皆さん図書館が好きで何か役に立つことができ、自分も楽しめれば良いのだと思う。

委員：図書館がなぜ好きなのかは？（三宮図書館が）そういう好きな図書館になっていくとよい。

委員：ひとりひとり、関わり方は異なるだろう。そこが違っててもかまわないのが図書館の良いところだと思う。私は人とつながりたい方なので、本を仲立ちにして子供とも仲間ともつながれる感じはしている。

委員：やはり動きのある場からだろう。

委員：前は観光のことについて否定的な話をしてしまったが、今回の配付資料などを見ていて、そういうことであれば「観光案内で、あそこの図書館の入り口のこういう資料を見てから観光に行くと 10 倍楽しめるよ」と言ってもらえるほどしっかりと作れば意味があるかと思った。観光案内で図書館を案内してもらえらるぐらいのものを作れば意味があると。例えば三宮図書館に行ってからあそこにいったらこうだったよ、というように。

委員：ツイッターのような広がりだろうか。

会長：まさしくインスタ映えだ。

事務局：図書館を訪れたときに、Facebook でチェックインする人は何人かいる。

委員：図書館でInstagramに情報が多いところとしては、現一位は岐阜のメディアコスモス、二位は大阪の中之島、三位は金沢の海みらい。やはり建物がきれいなところが多い。

委員：ビジュアルもよく、内容も一定以上の満足ができるということだろうか？

会長：先ほどの“10 倍”だが、例えば神戸の観光を、図書館で少し下調べというか、コンシェルジュという言葉が正しいかどうか分からないが、少し窓口で相談すると 10 倍楽しくなるというようなことは言ってもいいかもしれない。そういうレファレンスを受けるということではないか。

委員：観光ガイドのボランティアがいる。あるいは住んでいる人で在日コミュニティの人が自分たちの国の人だったら案内をすると言っている。そういうところとつながっていれば、住んでいる人と観光がつながる。観光の情報提供をするなら、コンベンション協会などと連携をした方が良いかもしれない。そういった情報を検索できるものが置いてあって、コンベンション協会のページが見られるのも良い。

委員：“10 倍楽しくする”に関して、高梁市や瀬戸内市にしても、観光客が見ることを想定して作られているかという、そうではないと思う。地域の人たちに地域の再発見を、というものだろう。あるいは高梁市も、観光客をかなり意識しているにしても、住んでいる人が特に何もなかった高梁には、実はこんなものがいろいろあるのだということを改めて見直す機会にもなっている。そういう意味では観光客だけではなく住んでいる人も改めて、神戸が 10 倍楽しいと思えるようなものになる可能性を秘めている訳だ。外の人に見せるというよりは、神戸の中であまり他の人が着目していないことでも、もう一度掘り起こす。それは図書館の膨大な資料の裏付けや、他とのつながりがあればやりやすい。そういった形で活かせる可能性がかなりあると思う。

委員：図書館だからこそ提供できる資料ということか。

会長：徹底的につながれば良いのではないか。

委員：キーワードは「つなぐ」。

会長：いろんな人と、いろんなところと…。

委員：先ほども話したが、14も宗教施設があることはあまり知られていない。世界の宗教巡りができるくらいである。とても喜んでもらえるだろう。イスラムのモスクに行くと、日本語とペルシャ語などの2言語になった紹介やパンフレットを貰える。私たちにも理解してほしいということだろう。その周りにはお店があって美味しい食べ物も買える。それはそれで観光だと思う。

委員：生田神社、長田神社、楠公さん、いわゆる3社巡りをする人がいる。それと同じだと思う。瀬戸内市などは奥まったところに展示しているのか？

委員：瀬戸内市は図書館に入ってすぐのところに（せとうち発見の道）がある。

会長：瀬戸内市は、真ん中にホールのようなものがあり、両側に建物を増設している。その両サイドから入った真ん中ぐらいのところに「せとうち発見の道」がある。カウンターの前の一等地にある。（実は、私はこのプロポーザルの審査員であった。）確かに瀬戸内市は「観光、観光」というところではないが、やはり佐藤委員が言ったように地域の再発見をするためのものなのだろう。図書館を建てるときに出てきた土器を、レプリカであるが、その発掘された感じで置きたいとのことであった。

この整備検討会は、この三宮の他にどこを一緒にやっているのか？

事務局：西図書館である。

会長：西図書館は何年後か。

事務局：平成33年秋を目途にしている。

会長：西図書館の方が早い。西ができて次に三宮ができるということだ。市内で2つの新しい図書館ができるのを機に市内全体の…（サービスを見直す）。神戸は大きすぎるのか？自治体として縦割りが厳しいのか？結局大きい行政は縦割りが厳格で、隣と少し情報提供しようとしても課長の許可をもらえないとできないということがある。小さいところだったらそれが簡単に進む。いろんな施設もありいろんなネタがあるのに、それがつながっていないような感じがする。11の図書館がありそれぞれのポイントに情報網が張り巡らされているのであれば、それをもっと強固にし、点がしっかりつながれば、そしてその点がさらにいろんな施設とつながれば、相当良いネットワークができそうだ。

委員：この三宮などがハブになって、つなぐ役割をすれば良いことか？

会長：1,500㎡しかないのでつなぐ場にしかならない。戦略としては、つながることで自分たちの資料としてはもっとたくさんあるように思わせないといけない。いや、思いたい。それで人と人がリアルにつながれば良い。1,500㎡ないものを強請^{ねだ}っても仕方がないので、無ければ無いなりに作戦を考えないといけない。

委員：作戦だが、シリウスも図書館単独での施設ではない。下にいろいろ入っている施設

をさも図書館の一部であるように紹介している。事務局の見学の報告の中にも図書館ではないところがたくさん入っている。前回の議論でも、屋上庭園をなんとか図書館の一部のように使えば施設用途が広がるのではということがあったが、ホールと図書館以外にそのようなものが入る予定はないのか？

事務局：バスターミナルがあるので、つながりで言うと西日本などへの路線がある。バスの利用は多い。

会長：それは観光客か？それとも市民の移動の足としてか？

事務局：兵庫県内の豊岡など、西脇、三木、三田エリアが一番多い。四国も多い。四国から来られる方は電車よりもバスが多い。

委員：図書館単独でそのようなエリアを作りにくいのであれば、図書館とターミナルはそんなに離れすぎないようにつながるように作っておいて、その間ぐらいにつながっているようなスペースをうまくデザインし、バスターミナルのお客さんなどの観光エリアからも、図書館の本を見に来てもらえるように作れたら良い。

委員：バスを待つ時間に図書館に行こうというような。

会長：借りて行ってもらったらどうだろう。先日徳島に行ってきたが、また戻ってくるのでその間、1、2日だが本を貸してもらえたらと思った。返しに行くのが面倒ということがあるかもしれないが。

事務局：淡路市との相互利用はしている。淡路市の市民が神戸の図書館で借りることができる。

会長：神戸は神戸市民でないと借りられないのか。

事務局：市域が隣接している市町にお住まいの方は借りてもらえる。淡路市は海を挟んでいるが隣接しているので借りられるということだ。それ以外では神戸に通勤、通学している人も借りられる。

委員：ここまでは神戸に来た人の話をしているが、神戸市民がバスで他の地域に行くときは問題ないのでは。先ほどの瀬戸内市でも東北に行くためのパンフレットなどを置いていたが、そういった行先の資料もこっそり見に来てもらえると良い。1,500㎡で全国の資料を手に入れておくのは困難だと思うので、そういう意味ではやはりただコネでつながっているだけではなく、ハブでつながっているところを工夫して見えるように作ってもらえる業者（再開発事業者）にお願いしたい。

委員：バスターミナルは必ず多言語対応する。それと一緒に図書館の入口も多言語化したい。

委員：バスターミナルの案内表示等と一体のサインで作ると、図書館も何もかも多言語のサインとなる。

会長：バスターミナルなのだから、バスに乗る人に本を貸した方が良いと思うが。

委員：行先のバスターミナルに返却ボックスを置いてもらって、帰ってくるバスに積んできてもらえば良い。

会長：バスの中で返してもらえば良いのではないか。

委員：移動図書館？バスを取り込んだら移動図書館ができるということ。

会長：バス会社と提携すればよい。新しい三宮図書館ができるのがバスターミナルであるならば、まさしくハブなので、他とつながることを考えるとバスとつながるというのも有りだろう。島根県の海士町で「島まるごと図書館構想」をやっているが、お金がないため、子供たちの本は学校図書館にあるので、と、中央図書館には置いていない。学校の本は地域の人が使え、島にあるいろんな施設の本棚には本がたくさんあり、そこで貸し借りをする。離島なのでフェリーターミナルがあり、そこにも本が置いてあるが意外に貸出が多い。中央図書館の次に多いのがそこである。やはりフェリーが2時間くらい、往復で4時間くらいかかるので1冊読めてしまう感じである。本棚の本は図書館方が管理しているので、1~2週間に1回は入れ替えられている。置いてある本がずっと同じでは駄目で、やはり変わっていかないといけない。

委員：今回の三宮は同じ建物なので、フェリーターミナルと比べるとコストが安くなるのではないか？駅に図書館があるところへはよく行っているが、バスターミナルというのはあまり思いつかないので。

会長：本が紛失することを恐れるのか。

事務局：そうだ。

委員：フェリーターミナルや駅前に返却ポストを置いている例があるが、通常の紛失と比べてどうか、事例調査してはどうか。通常でも図書館の本は多く紛失しているように思うが、それと同じレベル、あるいはその倍でも許容範囲と思う。10倍紛失となったら、殆ど返ってこない傘の貸出のようではあるが。

委員：管理ができていても使われない方がもったいない。多少紛失しても本が動いている方が図書館の意味がある。

委員：読み終わったらバスに置いて行ってと言えれば。（読み終わった本は）重いので、持って帰らないだろう。

会長：バスに返却できれば紛失は相当減ると思う。それを持って帰ってまた図書館に返せと言われると…。

委員：返すのが面倒くさいという理屈がある。もちろん悪質な者もいるが。

会長：何か面白いことだと思う。せつかくバスターミナルに複合するということであれば、何かやってもいいかと思う。バスターミナルとホールと図書館とあとはショッピングエリア、そこはまだ未確定か？

事務局：商業施設のことはまだ確定していない。

委員：公共施設、生涯学習センターなどは入らないのか？

事務局：今のところはない。

委員：資料の行事のチラシを見ると、催し物をするときに上の階の勤労会館を使われているが、勤労会館は今後はないのでは。

事務局：勤労会館とは別になる。勤労会館は中央区役所と一緒に市役所の方に移転する。

会長：現在の中央区役所も解体するのか。では、図書館が自前でイベントのためのスペー

スも用意しなければならないということになり、100㎡くらい必要となる。

委員：勤労会館は、現在は取り合いになるほどだ。それは立地が良いからで、向こうに移ってしまったら、逆にバスターミナルのあるビルを使いたいということがあるかも知れない。

会長：それは困る。図書館は無料の原則がある。図書館としてはこういったイベントをするなら、そのためのスペースは欲しい。あるいは会議室3つぐらい、会議室としてはそれぞれに使い、仕切り等を取り外せば大きくできるというものがよいだろう。

委員：サンパルはどうなるのか。

事務局：サンパルも全て解体する。サンパルと中央区役所と勤労会館が3つの事業で、そこにバスターミナルと文化ホールと図書館と商業施設、ホテルなどが入（つての検討となる）。

委員：返すのが面倒くさいとの話があった。今は1階だから本を返却ポストに容易に返せるが、中層階になることを心配している方がいる。

会長：徳島などでも図書館は駅前ビルの上に移転したが下の階に返却ボックスだけはある。

委員：もうひとつ心配していたのは、これまで図書館を気分よく利用していたのに、ホールが下にあるのは大丈夫かということ。他都市の事例でホールとエレベーターを共用にしている例（豊島区）があったが。

会長：ホールと図書館の動線を分けた方が良いのだが、複合しているメリットがなくなる。ホールは終わったときに大勢出てくるので、その人たちと図書館に上がっていく人がぶつかると良くない。1,500人は小さなエレベーターでは掃けないので大きな階段で下すことになり、図書館の利用者はエレベーターやエスカレーターで上がることになるだろう。図書館の利用者は大きな塊で来館することはないので何とかなると思っている。多くの人が下りてくる中を通っていくのは、大勢の人が苦手な人は苦手かもしれない。

委員：図書館の利用者はそういう人が多い。今日は止めておこうという人も（いるかもしれない）。コンサートが終わってハイテンションになっている人たちの中を通るのは大変かもしれない。

会長：シリウスはホール入口が横にあるので、そういう心配はあまりない。

前回は空間や設備のことでいろいろ出たのでこの辺りの意見は出ているかと思う。今日はバスターミナルのことから、興味のある話が少し出た。そして、ホールだけではなく他の施設ともうまくつなげていくということ。多文化、多言語の話も出たが、いろんなイベントが行われていても市民が知らないということがあるので、本当はどここの施設に行っても、例えば図書館に行っても保健所のイベントが分かるというような、違うところとのつながりは大切だと思う。お金をかけなくてもできそうなことだが、インターネットも普及しているが、自分の父親、母親の世代はまだパソコンやインターネットを見られていないので、そういう人たちへは必要かと。図書館でそうしたことができれば良いと思う。

委員：施設の名前のことだが、(地域の名前を冠した) なんとか図書館ではなく、瀬戸内市の「もみわ広場」や明石市の「+α」などロゴを凝っていたりなどあるのだが、「新三宮図書館」で良いのだろうか。

会長：出来てから公募などで決めるのが一般的で「もみわ広場」もそうだった。「シリウス」は分からないが。

事務局：「シリウス」は市が光り輝く施設であってほしいということから決定したと聞いている。

委員：建物全体に名前がついてしまうこともあるのでは。安城で建物に「アンフォーレ」という名前があるように。

会長：市民はもう図書館のことを「アンフォーレ」と言っている。

委員：建物ができたあとで、図書館が一番注目されることになれば、図書館が建物全体の名前を乗っ取ってしまうこともある。バスターミナルだから乗っ取るのは大変かもしれないが。

会長：バスターミナルと言われるのか。

委員：建物の名前はなるべくバスターミナルに因んだものにならないことを願う。

事務局：図書館ではあまり愛称などで呼ばない。垂水図書館はレバンテという建物の名前だが、レバンテの図書館とは市民は呼ばない。

会長：名前を付けるなら機運を高める間に愛称を決めて、完成と同時にそのロゴが入っていないといけない。サインもそうで「もみわ」もそうだった。「もみわ」の案内パンフなどは地元出身の方をお願いしたものである。

委員：デザイン都市神戸だから何かいいものができれば。

会長：図書館でグッズを販売しても良いのではないか。(図書館の) クリアファイルを集めている人を知っている。あまり高くないグッズを販売する。図書館で販売することは良いのか？

事務局：他都市では見たことがある。

委員：神戸らしい格好いいものができれば良い。

会長：そろそろ時間だが、前回よりも新しい意見も出た。基本方針やコンセプトについては、基本的には図書館の方で、今日の我々の議論でまとめていただければと思う。こういうものはごく当たり前のことが総花的に書かれてしまうことになるのだが、各委員からここは大切にしてほしいということをお話していただきたい。

委員：先ほどから言っているように、多言語、多文化である。どのような層の方が来たかなどこれまでの利用に拘らない(でよい)、それに合わせる必要はない。むしろこれまで来なかった人に図書館サービスを届けたい。

会長：アクセシビリティということ。バリアフリーなど、そういったことだけではなくもっと寄りやすいということ。近づきやすさという意味でアクセシビリティを大切にしていきたい。サインなども含めて近寄りやすい、近づきやすいというコンセプトで計画していただきたい。

委員：今日の話で出ていたことではつながるといふこと。ソフト面でもハード面でも図書館で完結するのではなく、図書館のサービスを使って人々がつながるようなものといふところを意識した計画を立てていく必要があり、狭いスペースであっても玄関口、そもそもターミナルにあるところから言ってもそこを意識した運営が必要だといふ気がする。他の図書館ともつなげていく、そこで人と人との多様性や観光のことでもつながるといふところを考えていただきたい。人と人とのつながりといふのは、最近の図書館では皆が言うキーワードで「もみわ」にもそのコンセプトが入っているが、今回の良いところはターミナルに併設されるという大前提があつて作られているので、つながるといふことをコンセプトにする必然性ははっきりしている点だ。一朝一夕に言つたつながりではないといふことを押し出していくとかなりコンセプトがはっきりした空間になっていくのではないか。

委員：いくつも地域図書館はあるが、チャレンジングな図書館が1館ぐらいあつても良いと思ふ。場所的にも新しいことや格好いいことといふイメージが三宮にはある。新しいことをしようと思ふと、失敗するのではないかと心配が先に立つが、できたら失敗しても良いからチャレンジをしてもらつたらと思ふ。構造的にも何か新しいことをするとなると変えないといけないことが多く出てくると思ふが、変えやすいような構造にしておいてもらえたらありがたい。失敗したらまたすぐに元に戻せるので失敗も有りといふような図書館が1館ぐらいあつても良いと思ふ。創造的な図書館といふか、そういうものになれば嬉しい。

会長：過去に行われていることをやってしまうと二番煎じと言われるので、新しいことをする人は過去を調べている。作家や芸術家、デザイナーはものすごく過去のことを調べている。チャレンジする人は昔のことを知つた上で、今されていない新しいことをやる。閃きの人もいるかもしれないが、意外と昔の歴史や文化を調べているので、そういつたことを底上げする。実は新しさといふのは古いものを知らないといふこと。

変えることについては、これまでは建物の寿命は60年ぐらいといわれている。これからは60年ではなく、市の公共施設は最低でも80年間使い続けたいと思つている。今の小学校なども本当は壊さないといけないのを補修しながら80年使おうといふので、それを考えると長い間使えるようにするといふのは大切なことだ。本棚が多く床に固定するので棚（のレイアウト）を変えるのは大変なことだが、側（がわ）をしっかりと作っておけば変えていくことはできる。本棚も60～80年は十分使えるので、長く使えるといふのはあるかもしれない。しっかり頑丈に、そしてあまり特定の機能に造り込まないといふこと。

委員：造り込んでしまつて使えなくなったオーディオ設備が残っている例もある。

会長：コンセプトや基本方針については、我々だけで決めることではなく、今日の議論や市の中で抱えている問題もあると思ふので、そういったことも含めて考えていただけたらと思ふ。最後に言つてもらつたようにチャレンジング、何か新しいことをやるような図書館があつても良いといふことはあるのか。それができるのは三宮かもしれない。

いので、面積的には大きいものではないかもしれないが中央図書館に匹敵するようなネットワークを三宮図書館が持てば、それなりに付加価値が出てくるのではないか。

私は新しい図書館ができたらやはり貸出冊数は増やしたいので、今まで来なかった人たちが来てくれて本を借りるようになってくれれば良いと思う。

4 閉会

事務局：次回は9月12日（水曜日）11時から13時の開催予定である。本日の会議の論点整理については、次回検討会までに事務局から送付する。

《配付資料》

- （資料1）検討会委員名簿
- （資料2）検討会開催要綱
- （資料3）第1回検討会キーワード整理（事前送付）
- （資料4）他自治体事例の調査・分析（事前送付）

《参考資料》

三宮図書館のイベントちらし